



吉田悦志教授



連合駿台会報

No.323 平成27年11月15日発行
 発行・編集 連合駿台会
 発行人 広報委員長・齋藤柳光
 編集人 事務局・矢嶋まゆ子
 〒101-0052 千代田区神田小川町三十二
 明治大学「紫紺館」内
 電話 (〇三三) 三二九六一四七七
 印刷 有限会社 美創

連合駿台会 九月例会

「明治大学の中の日本海文化」

— 岸本辰雄・宮城浩蔵 —

矢代操と子母沢寛 —

明治大学国際日本学部教授 吉田悦志氏

連合駿台会平成二十七年九月の例会を、九月十七日(木)十二時より、明治大学「紫紺館」四階会議室で、吉田悦志国際日本学部教授をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、山口政廣会長から次のような挨拶がありました(挨拶主旨)。

前回の例会で、安倍首相の戦後談話がどうなるかと懸念したが、おおむね世界的に良好な反応で、際立った論調がなかったように思う。特に未来志向という形で力を入れており、事前にいると情報を入手していたようで、根回しもだいぶ行ったようだ。ケネディ大使にアメリカの意向を確認し、また公

明党への配慮も怠らず、言葉の使い方も大変うまかったという印象が残った。

具体的に私が感心したことは、まず「我が国は、先の大戦における行いについて、繰り返し、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明してきた歴代内閣の立場は、今後、揺るぎないものである」ということで、歴代内閣の姿勢は継承するというものだ。さらに「和解のために力を尽くしてください。すべての国々、すべての方々に、心からの感謝の気持ちを表したい」ということは、和解を理解してくれた国が多いということを示唆しており、九月三日の中国に牽制をしていた。加えて、「戦時下、多くの女性たちの尊厳や名誉が深く傷つけられた過去を、この胸に刻み続け、二十一世紀こそ、女性の権利が傷つけられることのない世紀とするため、世界をリードしたい」というのは、倍首相の女性活用もあるが、暗黙のうちに韓国に対するお詫びの気持ちも込められていたと思う。

そして私が感ずるところ、首相が一番気を使ったことは、「日本では、戦後生まれの世代が、今や、人口の八割を超えており、あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはならない。しかし、それでもなお、私たち日本人は、世代を超えて、過去の歴史に真正面から向き合わ

なければならず、謙虚な気持ちで、過去を受け継ぎ、未来へと引き渡す責任がある」ということだろう。一部の国からは、日本は謝罪をしると言われ続けられていることを、どこかで断ち切ろうとしているのだとも言われているが、この言葉は特に意味深いと感じた。

ちなみに、第二次世界大戦後、アジア各国は終戦の日をどのように表現しているか調べてみた。ほとんどが「独立記念日」「建国記念日」という名の祝日となっているが、韓国は八月十五日を「解放記念日」あるいは韓国流で「光復節」と呼び、中国では九月三日を「中国人民抗日戦争および世界反ファシズム戦争勝利の日」という名の祝日としている。この名称を変えない限り、未来永劫、反日感情を植え続けることになり、これを変えることが和解の一步かと思う。

大学のことで言えば、みなさんもご承知のように、法科大学院での不祥事が世間を賑わせている。九月五日・六日に全国校友全国体が滋賀県で開催されたが、戻ってきた翌日の夜に第一報が入り、それから次々に報道が始まった。われわれ校友としても大学支援の立場から言えば残念なことだが、いろいろな報道のなかでは面白おかしく書かれてしまうので、私たちとしては正しい認識のもと、真摯に対応していきたいと思う。個人的に申せば、校歌に謳われる「権利自由・独立自治」の精

神を忘れてなければ今回のようなことはなかったと思うし、当事者の教授も学生（の学部）も明治大学出身ではなかったので、よい残念に感じられる。われわれも気を緩めることなく、明治を愛し、明治のために尽くすことを、改めてお誓いしたいと思っている。当日の講演の要旨は以下の通りです。

(1) 森鷗外の歴史観

森鷗外が史伝『洪江抽斎』の中で、歴史には「正史」と「稗史」があると確か叙述したはずである。「正史」を公式な歴史記述とするなら、「稗史」は非公式な歴史記述である。前者に軸足を置くならば歴史学に、後者に軸足を置くならば歴史文学に、それぞれ歩を進めることになる。鷗外のいわゆる「歴史そのまま」と「歴史離れ」である。立体的で現実感ある歴史記述をもとめて、両者を塩梅することもあり得よう。「稗史」的記述が混じっているから、大嘘をつくというのではない。その意味では状況証拠積み重ね型の説得力ある「稗史」を、わたしは書きたいと常日頃から切望している。

(2) 明治大学創立者三人

さて、明治大学は一八八一（明治十四）年に「明治法律学校」という名称で設置された。明治十三年十二月八日付け東京府知事・松田道之宛「明治法律学校設立上申書」には

岸本辰雄と宮城浩蔵と矢代操の三名が連名で届出したことが記されている。また明治十四年一月の「明治法律学校設立の趣旨」というこの学校の関係者が一度は見聞きする文書には、「創業者」とだけ記されている。「創業者」がこの三名を指すのは間違いなからう。

(3) 明法寮の五人組

ただ、わたしの脳裏をかすめる鮮やかで忘れがたい文書「長直樹氏遺稿写」が、明治法律学校設立者三名に「創立者」として、あと二名をくわえるようにという「稗史」的誘惑を囁く。薩摩藩出身の長直樹（直四郎）が記した「遺稿」に、こうある。

「磯部四郎 岸本辰雄 宮城浩蔵 杉村虎一 矢代操は明法寮学生の時分より五人組と称されし程の連中」であった。長直樹は、鯖江藩の江戸詰藩士であった中村助九郎という人物の長女・銈と結婚しており、矢代操は中村の次女・政子と結婚している。つまり長直樹と矢代操には血縁はないが、縁戚関係にあつて、極めて近い関係であったのである。しかも、維新後中村助九郎が営む炊き出し屋と下宿を兼ねた「常平社」に、長直樹も矢代操も、そして岸本辰雄も磯部四郎も宮城浩蔵も下宿して、いわゆる同じ釜の飯を食った仲間であった。

長直樹は、明治法律学校はこの五人によって作られたと言っているのである。

(4) 明治大学と日本海文化

詳細は割愛するが、五人が北陸・山陰という日本海地域出身であることは、講演のテーマであるから強調しておきたい。中央だけではなく地方や地方的なるものへの目配り、権力だけではなく民衆や大衆に関心を寄せる明治大学の伝統精神の根元に、明法寮の五人組が鳥取藩、天童藩、鯖江藩、富山藩、加賀藩出身という地域性が確実にある。明治大学の特徴であるポピュラリティと言っている。

作家・子母沢寛や、そして高倉健や阿久悠も五社英雄も、その延長線上に存在しているのである。

(5) 高倉健主演映画『駅 STATION』と阿久悠

高倉健という存在が、この世にいないこととの事態の深刻さを、私はまだ実感していない。まだ納得していない。時を経て確実にその喪失感が増す予感だけが、今は、ある。二〇一四年十一月十日、享年八十三歳。

石狩湾岸を

舞台にした

『駅』。監督・

降旗康男、脚

本・倉本聰、

主演・高倉健、

主演女優・倍

賞千恵子、音



石狩湾岸地図と『駅』

楽・宇崎竜童である。高倉健と宇崎竜童が本学卒業生。高倉扮する警察官三上英次が、妻（いしだあゆみ）と別れるのが、函館本線の銭函駅。やがて舞台は留萌本線増毛駅に変わり、桐子（倍賞千恵子）と出会う。銭函駅から増毛駅までの石狩湾沿いには、百五十キロ程度だろうか、いまでも鉄路はない。内陸を函館本線から留萌本線へと乗り継いだはずだ。

駅や鉄道が人生における離別と邂逅の象徴として映し出される絶好のロケーションこそ、倉本聰の優れた手腕を物語る。晦日、大晦日、増毛の小料理屋「桐子」のテレビから、八代亜紀が歌う阿久悠作詞『舟唄』が流れる。心憎い降旗監督と倉本聰の演出である。阿久悠は文学部卒。

(6) 石狩国厚田村出身作家子母沢寛

幕府側の彰義隊メムバーとして上野で闘い、やぶれて函館に転戦して、さらに敗れて、石狩国厚田村に逃れた敗残兵・梅谷十次郎。本学法科出身で『新撰組』三部作や『座頭市物語』の原作者・子母沢寛の祖父である。

厚田は、『駅 STATION』の舞台、銭函と



高倉健主演『駅』の舞台・増毛駅

増毛の間にある現在もなお鉄路無き、小さな漁村である。子母沢寛は、彰義隊の生き残りで血のつながらぬ祖父に育てられた。後年歴史文学史上はじめて「新撰組」を評価した三部作を書いたのは、この祖父の膝上で養育された事情抜きでは理解できぬ。自然環境の厳しさと、祖父の存在と、惨憺たる血族関係が、子母沢寛文学の基底にある。

(7) 『北の螢』と新撰組・永倉新八

東映社長・岡田茂は、阿久悠に映画のタイトルだけ考えてほしいと奇妙な依頼をした。阿久が考えた『北の螢』が採用され、和田宏治が脚本、五社英雄（本学卒）が監督に決まった。五社が阿久に歌を依頼して出来たのが、阿久悠作詞、三木たかし作曲、歌森進一の歌謡曲『北の螢』であった。女の魂が螢と化して飛ぶ。虚構ではあるが、実在する場と人物が登場する。石狩原野、現在の樺戸郡月形町にあった樺戸集治監（刑務所）が舞台。

明治十四年に設置され、西南戦争に象徴される不平士族たちが多く収監された。仲代達矢が演じた初代典獄の月形潔と、そこに剣術指南に来た新撰組残党・



北海道・樺戸集治監（月形）

永倉新八が実在人物である他は、全てフィクションである。

(8)石狩湾岸に集った歴史と文化

歴史的には、新撰組や彰義隊の敗残兵や不平士族たちが人知れず逃れ住むか幽閉された北の原野。この石狩湾岸の厚田辺りを中心にした三日月上弦の月地形は、歴史の悲しい鶴がいた塵塚である。ここで、ここから、本学関係者の映画や音楽や文学が作られてきた。歴史の暗部(地域性)にまで思いを致す明治大学の「弧を抱えて個に向う」精神伝統が、場とつながって、ポピュラリティを確立した状態の典型が石狩湾岸の、この地形の中にある。

◆広報委員会からのご案内(理事会議事録)

日時…平成二十七年九月十七日(木)十二時
場所…明治大学「紫紺館」(二F会議室)

○新推薦会員承認の件

大原委員長が欠席のため、高澤副委員長から、入会薦書が提出されて須貝栄氏・木下唯志氏・埴英幸氏について、組織・会員増強委員会では入会を承認したという報告があり、全員異議なく承認された。

○各委員長よりの報告事項

〈総務・事業委員会 河村副委員長〉
今後の行事日程の報告があった。十月二十

〔講師略歴〕

吉田悦志(よしだ・えつし)

一九七一年明治大学文学部卒、同大学院博士課程単位取得退学。二〇〇八年埼玉大学にて博士(学術)取得。一九八二年明治大学政治経済学部専任講師、一九八五年助教授、一九九〇年教授、二〇〇八年から国際日本学部に授に就任(現在)。

専攻は日本近世近代の文芸、『上司小剣(かみすかさしろうけん)論』『きみに語る—近代日

本の作家と作品』『尾佐竹猛研究』などの著書がある。近年、「大学史の中の文化史 明治大学」をテーマに研究。『明治大学小史 人物編』を出版。二〇一二年四月学内に「昭和歌謡史研究会」を発足させて、古賀政男や阿久悠の共同研究を開始した。二〇一四年三月「明治大学の中の地域文化」(論文)を発表、明治大学創立者や卒業生・子母澤寛を論じた。二〇一四年十二月「阿久悠—人と作詞作品—」(「阿久悠研究」大学史紀要所収) 発刊。

一日(水)には、第五回ビジネス勉強会を開催、講師は(株)埼玉りそな銀行代表取締役社長の池田一義氏にお願いしている。また十一月十日(火)にはオープンゴルフコンペを、小金井カントリー倶楽部で開催(この二件は開催済み)。十一月例会は、十八日(水)に忘

年会を開催、年が明けて平成二十八年一月の例会(駿台懇話会)は、日程・会場とも未定で、決まり次第ご連絡する。新入会員歓迎会を二月の運営委員会後に予定、また二三月の予定にて、宝塚観劇と夕食会を開催予定。三月十六日(水)例会の講師は西澤豊氏(株)時事通信社・代表取締役社長)に依頼済み。四月実施予定のビジネス勉強会の講師は未定。五月二十日(金)は総会。

〈大学支援委員会 中川委員長〉

今後の予定として、まず十月十日(土)開催のお茶の水ジャズ祭の協賛および後援、十月十八日(日)にはホームカミングデーに協賛し、パンフレット広告および福引景品を提供。シェイクスピアプロジェクトは、十一月十三日(金)〜十五日(日)に開催され、当会としては十四日(土)の昼の席を十〜二十席ほど予約する。今年度の秋期寄付講座は、十一月五日(木)、先の議案で当会の会員に推挙された、木下唯志氏(木下サーカス(株)代表取締役社長)にお願いした(すべて開催済み)。

〈広報委員会 齋藤委員長〉

当会の連絡になるべくメールを取り入れたいと思っているが、実施するにあたり、まず会員皆さんからメールについて意見を聞かせてもらうことにしたいと思っている。

これに関して、次のような意見があった。

・アドレスが公開されると世界中から関係ないメールが入るので、心配している。

・私はかなりのメーリングリストを扱っているが、セキュリティに関して、いろいろな方法もあり、問題はないかと思う。

・メールについて皆さんの意見を聞き、また専門家からのセキュリティ対策を参考に、広報委員会で運営、管理方法について皆さんにお諮りすることとする。

〈財務委員会 谷委員長〉

前回の理事会において、六月度までの年会費収入の納入状況が、713万676円であり、前年同期の1052万2000円と比較して334万8324円減少していること、納入会員数が百五十九人であり、前年同期の二百二十八人と比較し六十九人減少していること、その原因は、事務局が請求書の郵送を簡易化するため、請求書を次回の例会案内と一緒に送ったため、昨年より請求書を出すのが遅れたことによるものと思われること等を報告した。今月のご報告としては、八月度までの年会費収入の納入状況は、1141

万5676円であり、前年同期の1306万

8676円と比較して165万3000円減

少しており、納入会員数は二百五十三人であり、前年同期の二百八十三人と比較して三十人減少した。未納入者のうち、二年未納者が

十四人、三年未納者が四人いらつしやつた。

請求書発送の遅れという原因は解決されたものの、二年未納者のうちには高齢者や役員もおり、忘れている方も多いと思われる、再請求をなるべく早く出すこととした。

上記の年会費収入減少見込みに伴い、支出項目を合理的にコントロールしていただくことを各委員長にお願いした。以上

◆新入会員ご紹介

前回までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(敬称略)



須貝 栄
昭和三十九年・商学部卒
東京国際大学・教授
東京都港区在住



木下 唯志
昭和四十九年・経営学部卒
木下サーカス(株)
代表取締役社長
岡山県岡山市在住

◆訃報

会員で、お亡くなりになっていたことが判明された方々をお伝えいたします。

・中島御幸氏(昭和三十六年・政経学部卒、三月二十六日逝去、享年七十七歳)

・橋口 隆氏(昭和五十九年・商学部卒、三月逝去、享年五十四歳)

・井上義男氏(昭和二十六年・商学部卒、九月十三日逝去、享年八十七歳)

・宝井馬琴氏(昭和三十四年・文学部卒、九月二十五日逝去、享年八十歳)

ご冥福を心からお祈り申しあげます。

◆明大ニュース

●おかえりなさい!母校へ

第十八回ホームカミングデー

年に一度、校友(卒業生)を母校に迎え、「第十八回ホームカミングデー」が十月十八日、駿河台キャンパスで開催された。当日は好天にも恵まれ、三千八百人の校友やその家族らが来校。懐かしい旧友との再会や、後輩にあたる学生との交流などを楽しんだ。

●第五十一回全国校友滋賀大会

千二百人余の校友が琵琶湖に集う

明治大学校友会は九月六日、滋賀県大津市の大津プリンスホテル三階プリンスホール

で、「第五十一回全国校友滋賀大会」を開催。北海道から沖縄県の校友会各支部、そして韓国・台湾の海外支部から千二百人余の校友が参集し、旧交を温めるとともに、新たな絆も生まれた。五日の前夜祭では、琵琶湖上遊覧船二隻によるクルージングと湖上火花が企画され、滋賀県支部のおもてなしに酔いしれた。

●私立大文科系部門(東日本)で

四年連続一位

全国の日本語学校が選ぶ日本留学アワーズ(留学生に勧めたい進学先)の私立大文科系部門(東日本)で、明治大学が四年連続一位に輝いた。日本留学アワーズは、日本留学を志す多くの外国人留學生の環境整備に貢献することを目的に、二〇一二年に創設。今年はその日本語学校百六十六校から四百七十一票が集まり、専門学校部門▽私立大文科系部門▽私立大理工系部門▽国公立大文科系部門▽大学院部門をそれぞれ東西に分けた計十部門から、四十一校が上位校に選出された。

●人文研公開文化講座

芥川賞・羽田圭介氏が対談

明治大学人文科学研究所は十月二十四日、第四十回公開文化講座「文学と読書の現在―第一線からのまなざし―」を駿河台キャンパス・リパティホールで開催。『スクラップ・

アンド・ビルド』で第百五十三回芥川賞を受賞した校友の羽田圭介氏(二〇〇八年商卒)が第二部の対談に登場し、会場を沸かせた。

第一部では、平尾隆弘特別招聘教授(前文藝春秋社社長)が「文学とジャーナリズムの間」をテーマに講演。アメリカの大学での銃乱射事件をモチーフにした『33個めの石』や『アンネの日記』などの作品を例に挙げながら、「内なる声から生まれる文学的表現と、外なる声から生まれるジャーナリズムの表現。社会にはいずれも必要」と鋭く分析した。

●OB社長

▽東亜バルブエンジニアリング(機械) 〓真鍋吉久氏(一九七一年工学部卒・六十七歳、十二月二十二日就任予定)

●系列法人・国際大学

新理事長・学長が就任

明治大学の系列法人である国際大学(IUJ、新潟県南魚沼市)の新理事長に六月一日付で槍田松瑩氏が、新学長に十月一日付で加瀬公夫氏が就任した。任期はいずれも三年。両氏の主な経歴は下記の通り。

▽学校法人国際大学理事長 〓槍田松瑩氏
一九六七年東京大学工学部卒業。三井物産入社。二〇〇二年社長、二〇〇九年会長。二〇一五年より取締役。日本経団連副会長を

経て二〇一〇年日本貿易会会長。日本銀行参与など歴任。二〇一四年一月学校法人国際大学理事就任。七十二歳。

▽国際大学学長 〓加瀬公夫氏
一九七二年東京外国語大学外国語学部卒業。一九九六年マンチェスター大学経営大学院経営学博士取得。米州開発銀行評価局など多数を経て、二〇一三年九月国際大学国際経営学研究科長就任、二〇一四年四月同副学長就任。六十六歳。

●「鳥取メタンハイドレートコアセンター」を開設

新たなエネルギー資源として注目されるメタンハイドレートの研究促進や、明治大学と鳥取県・鳥取大学との連携推進を目的とする「明治大学鳥取メタンハイドレートコアセンター」が九月三日、鳥取市の鳥取港湾事務所に開設された。日本海沖の調査で採取される海底地質試料(コアサンプル)を大量に冷蔵保管できる施設で、メタンハイドレートの資源量評価や学術的調査研究の拠点として期待が高まっている。

●産官学連携や創業・ベンチャー育成を支援

「研究成果活用促進センター」活動報告

明治大学研究成果活用促進センター(旧…明治大学インキュベーションセンター)はこ

のほど、センターに入居するベンチャー企業や法人等の二〇一四年度活動報告を取りまとめた。活動報告の作成は今回初の試みで、明大ホームページ上でも公開している。

研究成果活用促進センターは研究活用知財本部の下に設置され、明大の研究成果に基づく産官学連携の支援、および研究成果を活用した起業支援を行っている。

研究成果の活用を促進するためのスペースとして、駿河台キャンパス・グローバルフロント内に七室の施設を設置しており、ここでは教員・卒業生を中心とした人的ネットワークなどを活用し、創業・ベンチャー育成に必要な支援を行っている。これまでにおよそ二十のプロジェクトについて事業化が取り組まれ、十社余りの会社設立の実績があり、現在も多様な入居者が積極的に活動している。

●二〇一五年度 創立者出身地への

学生派遣プログラム

明治大学社会連携機構では、本学創立者三名の各出身地（鳥取県、山形県天童市、福井県鯖江市）との連携協力に関する協定に基づき、八～九月に「学生派遣プログラム」の現地調査を実施した。このプログラムは、学生が創立者出身地に赴き、人々との交流・連携を通じて、地域活性化への提言を行うもので、今年度は全学から二十八名の参加を得て

実施された。プログラムは「事前勉強会」と「現地調査」（三泊四日）から構成され、現地調査の最終日における「中間報告会」を経て、十月末を目途に最終報告書を作成し、各自治体へ提出する予定。

●就職キャリア支援センター

「就職・進路ガイダンス」開催

就職キャリア支援センターは九月二十九日から十月十四日、二〇一七年三月卒業・修了予定の学生全員を対象にした「就職・進路ガイダンス」を駿河台・生田・中野の三キャンパスで開催。学部学科や専攻別、外国人留学生向けなど対象を分けて行われ、多数の学生が連日会場を埋めた。

十月八日に駿河台キャンパスで行われたガイダンスでは、就職活動のノウハウが詰まった明治大学オリジナルの「就職活動手帳」を用いながら、同センターの担当者がインターンシップや自己分析、業種・業界研究、筆記・面接試験対策などについて説明。

五千社以上の情報が入った求人検索システム「JobMeji」や、明大の財産とも呼べる「就職活動報告書」、内定学生がこれから就職を迎える学生をサポートする「学生キャリアサポーター制度」など、あらゆる明大の就職支援を活用して自ら積極的に情報を取りにくよう、学生たち呼びかけた。

●明治大学的探訪

生田で「知る」楽しさ体験

「多摩区・三大学連携協議会」は十月十日、協定締結十周年記念事業として「明治大学知的探訪」と題するイベントを生田キャンパスで開催した。イベントは、「理工学部・一身体験授業」「特別講座」「キャンパスツアー」と大きく三つに分けられ、当日は、二百名以上の幅広い年齢層（五～九十三歳）の方々が参加した。

理工学部・一身体験授業のひとつである「金属の旅―金色メダルをつくらせてみよう」では、小学生を対象に金属の化学実験を行った。銅メダルを金属磨きで磨き、水道水で洗う。続いて、水酸化ナトリウム水溶液と亜鉛の粉を混ぜて「めっき液」を作り、100℃に加熱。そこにメダルを入れ水で洗うと銀メダルに。100℃のホットプレートでメダルを加熱し、空気で冷ますと金メダルになる。銅メダルが銀メダル、金メダルに変化する様子に、小学生だけでなく保護者も感嘆の声をあげていた。

●過去最高の盛り上がり

第九回「お茶の水JAZZ祭」

音楽の街・御茶ノ水の秋を彩る「お茶の水JAZZ祭」（明治大学など主催）が十月十日、駿河台キャンパス・アカデミーホールを

会場に開催された。校友の宇崎竜童氏（音楽家）・阿木燿子氏（作詞家）夫妻が毎回総合プロデューサーと総合同司会を務め、すっかり恒例となったジャズの祭典も今年で九回目。名だたるアーティストたちが奏でるサウンドに、会場は過去最高の盛り上がりを見せた。

●三鷹ネットワーク大学

開設十周年記念シンポジウム

東京都三鷹市が二〇〇五年十月に開校した「三鷹ネットワーク大学」の設立十周年記念シンポジウムが九月十七日、同大学で開催された。明治大学は、杏林大学、国際基督教大学、国立天文台、東京農工大学、法政大学、立教大学など十九の教育・研究機関とともに、正会員としてその発展に努めてきた（設立時は明大含め十四機関）。当日は、福宮賢一学長の代理として筆者が記念式典に参加し、感謝状を授与された。

「三鷹ネットワーク大学」は、教育・研究機関の地域への開放と、地域社会における知的ニーズを融合し、「民学産公」の協働による「新しい地域の大学」の確立を目指したプロジェクト。市民が地域で活躍するための知識や手法の獲得を支援し、地域の人材をさらに生み育てるとともに、協働のまちづくりを進める中で、より豊かで安心できる市民生活の実現を目指している。

●和泉キャンパス

「自転車安全利用講習会」を初実施

自転車通学の学生が多い和泉キャンパス。安全な利用を啓発しようと十月五日、「自転車安全利用講習会」が和泉キャンパス正面メインアプローチで初実施された。約二百人の学生らが参加し、関心の高さをうかがわせた。

この講習会は、今年六月の改正道路交通法の一部施行により、悪質で危険な運転を繰り返す自転車運転者に対して講習の受講が義務化されたことを受け、高井戸警察署、荻窪警察署、杉並区の協力で企画されたもの。今回、自転車は利用ルールを守らないと重大事故を引き起こしかねない危険な乗り物であるということ、スタントマンによる事故現場の再現を見ながら再認識する「スケアード・ストリート」という手法で実施された。

●リバティアアカデミー

「縄文の資源利用と社会」を開催

明治大学の生涯学習機関・リバティアアカデミーは十月二十四日、「縄文の資源利用と社会」と題するオープン講座（後援：千代田区）を駿河台キャンパス・リバティアタワーで開催。明大日本先史文化研究所と漆先端科学研究クラスターが共同で進めている、縄文時代の資源利用技術に関する研究の最新成果などが紹介された。

●国連ユースボランティア

井土さん（国日3）が派遣先のガーナで優勝

明治大学を代表し、国連ユースボランティアとしてアフリカ・ガーナに派遣されている井土元樹さん（国日3）が、現地到着三日目の九月二十七日に出場した「アクラ国際マラソン（Accra International Marathon 2015）」で、初マラソンながら見事に優勝を果たした。タイムは三時間四十二分二十四秒。

井土さんは体育会競走部員だが、長距離ではなく短距離ブロックの所属で、専門は八〇〇㍎。そんな井土さんが同大会に出場したのは、以前アメリカに留学した際にも、長距離のレースに出場したことがきっかけだった。

●世界に広がる協定校

四十四カ国・地域二百六十二大学と協定

明治大学は、新たに海外の五大学と大学間協力協定を、二大学と部局間協力協定を締結した。協定校はこれで四十四の国と地域、二百六十二大学となった（十月十六日現在）。

●清華大学（中国）の学生七人を受け入れ

国際連携機構は十月二日から九日まで、日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）のプログラムとして、中国・北京市にある清華大学から学生

七人を受け入れた。さくらサイエンスプランは、アジアと日本の青少年が科学技術の分野で交流を深め、日本の最先端技術に触れることで、日本の大学・研究機関や企業が必要とする海外人材を育成することを目的としたもの。国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が公募する事業で、今回のプログラムは明大初の採択となる。

プログラムの中心は、植物工場や黒川農場、振動実験解析棟など最先端技術を駆使した本学の研究・教育現場の見学および、理工学部の学生との研究発表会。施設見学では、サステイナビリティにまで配慮した日本の科学技術の高さやそれに対する社会の期待などの説明を受け、清華大の学生は大いに感心していた。研究発表会ではお互いの研究について活発な意見交換を行い、清華大の学生だけではなく本学の学生にとっても、今後の研究に役立つ貴重な経験となった。

●ケンブリッジ学生劇団

『間違いの喜劇』公演

英国・ケンブリッジ大学ペンブルックカレッジの学生劇団「ペンブルック・プレイヤーズ」によるシェイクスピア『間違いの喜劇（The Comedy of Errors）』の公演が十月二日、駿河台キャンパス・リバティホールで行われた。これは国際連携本部が二〇〇一年度

にスタートさせた「英国研究」の一環で、公演は今年で八回目。同劇団は一九五五年の創設以来、多くの著名な俳優を輩出してきた名門として知られる。公演では、若き学生劇団員がエネルギーで感情表現豊かな演技を披露。会場を埋めた明大の学生や教職員、一般の来場者らが、大きな拍手を送っていた。

●大学生観光まちづくりコンテスト二〇一五

大学生観光まちづくりコンテスト運営協議会（事務局・㈱JTBコーポレートセールス、㈱三菱総合研究所）が主催し、観光庁、文部科学省等が後援する「大学生観光まちづくりコンテスト二〇一五」で、市川宏雄ゼミ（政経）が大分県知事賞と山梨県知事賞、歌代豊ゼミ（経営）がマイナビ賞とパフォーマンス賞を受賞した。同コンテストは、説明会・基礎講座、現地フィールド調査・分析に基づき、大学生が観光まちづくりプランを競い合うコンテスト。五回目を迎える今年には、青森、山梨、大阪、大分（新規）の地区別ステージが開催されたほか、東京での留学生ステージが新設された。歌代ゼミは五年連続、市川ゼミは四年連続の受賞。

●端艇部・富田選手に「鳥取県スポーツ顕彰」

七月に韓国・光州で行われた第二十八回ユニバーシアード競技大会の「ボート女子軽

量級ダブルスカル」で金メダルを獲得した体育会端艇部の富田千愛選手（政経4）は米子東高校出身。九月二十日、地元鳥取県から「鳥取県スポーツ顕彰」を授与された。

鳥取県の知事公邸で同日行われた授与式で、富田選手には平井伸治知事から賞状と記念品が贈られた。富田選手は「リオデジャネイロ五輪に出場できるよう努力したい」と、今後の抱負を語った。

●東京駿河台ライオンズクラブ

二十周年記念式典を開催

明治大学の校友（卒業生）で組織する「東京駿河台ライオンズクラブ」が結成二十周年を迎え、駿河台キャンパス・アカデミーコモンで九月二十六日、記念式典が行われた。式典には、同クラブの金子邦彦会長（情報コミュニケーション学部教授）をはじめ、日高憲三理事長や福宮賢一学長ら明大関係者らが多数出席し、二十年の節目を盛大に祝った。

●体育会硬式野球部

現役三人、OB二人がプロの世界へ

プロ野球ドラフト会議が十月二十二日に都内で行われ、体育会硬式野球部からは高山俊外野手（文4）日大三）が阪神タイガース、東京ヤクルトスワローズの二球団から一位指名を受け、阪神が交渉権を獲得。上原健

太投手（商4＝広陵）が北海道日本ハムファイターズから一位指名を受けた。また、主将の坂本誠志郎捕手（文4＝履正社）も高山外野手と同じく阪神から二位で指名された。硬式野球部から複数名が一位指名を受けるのは、一九八四年の竹田光訓氏（大洋）、広沢克己氏（ヤクルト）以来、三十一年ぶり二度目の快挙。

なおOBからは、関谷亮太投手が千葉ロッテマリーンズから二位で、阿部寿樹内野手が中日ドラゴンズから五位で指名された。

●ドラフト一位・高山外野手（文4）が

六大学野球新記録を達成

プロ球団二チームからドラフト一位指名された体育会硬式野球部の高山俊外野手（文4）が、東京六大学野球の最多安打記録を塗り替える通算百三十一安打を達成した。

●柔道部 小川選手（政経1）が

体重別一〇〇キ超級優勝

バルセロナ五輪銀メダリストで、世界選手権を四度制した小川直也氏（一九九〇年経営卒）を父に持つ体育会柔道部・小川雄勢選手（政経1）が、第三十四回全日本学生体重別選手権の最終日（十月四日）、男子一〇〇キ超級で優勝。父と同じく一年生で学生王者となった。世界への大きな一歩を踏み出した

小川選手。父の直也氏と同様に翌年の世界選手権優勝、さらには偉大な父もなし得なかった五輪金メダル獲得を目指す。

●水泳部

インカレ八十六年ぶり男子総合V

第九十一回日本学生選手権水泳競技大会が、九月四日～六日に浜松市総合水泳場TOBIOで開催され、体育会水泳部が八十六年ぶり三度目の男子総合優勝を決めた。女子は総合六位。ともに、次回インカレ（第九十二回）のシード権を獲得した。

男子は、三位以内に入れば総合優勝が決まる最終種目の八〇〇メートルで、途中までは七位だったものの、第三泳者の松元克央選手（政経1）が四人抜きで三まで順位を上げ、アンカーの平井健太選手（商3）がそのままゴール。歓喜の瞬間を迎えた。

●硬式庭球部

関東学生選手権・男子シングルスで

湓田選手（商3）が初優勝

テニスの関東学生選手権が九月十六日～二十三日に秩父ミュージズパークで行われ、男子シングルス決勝では体育会硬式庭球部の湓田大樹選手（商3）が、早大の坂井勇仁選手と対戦。セットカウント2-1で勝利し、悲願の初優勝を飾った。

◆駿台トピックス

●第五回ビジネス勉強会を開催

十月二十一日、紫紺館にて、埼玉りそな銀行代表取締役社長の池田一義氏を講師としてお招きし、「りそなの経営改革『リテールNo.1』をめざして」というテーマで、第五回ビジネス勉強会が行われました。池田社長は昭和五十六年に本学商学部をご卒業され、連合駢台会の会員でもあります。勉強会には六十名近くの会員が出席され、会員の関心の高さが伺われました。

二〇〇三年にいわゆる「りそなショック」を契機に、当時JＲ東日本副社長だった細谷英二氏を会長に迎え、りそなグループの経営改革が行われましたのは皆様もご存じと思います。公的資金を完済し、オペレーション改革などメガバンクとの差別化を図るりそなグループの経営改革について、細谷会長の側近としてご尽力された池田社長の実体験を交えたご講演には、大変興味深く聞き入りました。例えば「役員に求められる人材像」や、「3ない」「3レス」に代表されるオペレーション改革など、他では聞けないような話もたくさん伺いました。また、りそな改革に命を捧げた細谷会長の「百術は一誠にしかず」、「危機は良き友、時間はライバル」、「上、三年にして下を知り、下、三日にして上を知

る」という言葉は、経営に
関わる者として肝に銘じなければならな
いと感じまし
た。

講演後、軽
食とビールを
飲みながらの
質問も活発
で、ライブル

である大手都市銀行の役員からの質問も飛び
出すなど、当会ならではの光景も見られ、和
気藹々として盛り上がった勉強会となりました。

(広報委員・相臺志浩¹平成九年経営卒)

●寄付講座「一日一死」を開催

明治大学リバティアカデミー連合駿台会
寄付講座を十一月五日、駿河台キャンパス・
グローバルフロント一階グローバルホールで
開き、木下サーカス代表取締役社長で世界
サーカス大使の木下唯志氏に「一日一死」
今日一日を真剣に生き抜くこと」と題して
ご講演をお願いしました。木下社長は一九七
四（昭和四十九）年本学経営学部卒で、在学
中は体育会剣道部でも活躍されました。祖



父・木下唯助氏が一九〇二年に興した木下
サーカスを父・光三氏、兄・光宣氏に続く四
代目社長として日本を代表するサーカスに育
て上げてきた十五年余の体験を満席二百人余
の受講者に語っていただきました。

木下社長は、時代の波にもまれながらも
百十三年目に入った木下サーカスの輝かしい
歴史を解説した上で、剣道の修業で自らの人
生観を培い、それを経営の原点にしたと言
います。そこで学んだことは、「今日一日を真
剣に生き抜くことでどんなことでも乗り越え
られる」というものだったと言います。木下
氏はそれまで、中学で野球、高校で柔道に
チャレンジしながらも、他方で「人間はなぜ
生きているのだろうか？」と悩んで出家も考え
るほど内省的な一面を持っていたそうです。



さらに、木

下サーカスに
入社して三年
目、自らが挑
んでいた空中
ブランコで落
下して頸椎を
損傷して入院
加療、さらに
信貴山朝護孫
子寺で三年間
六回に及ぶ断

食修行までして体とともに心を浄め再起した
と言います。その「絶対に諦めない」という
信条で、兄の急逝で引き受けた負債十億円以
上をかかえた厳しい経営も乗り越えていく苦
闘と栄光の軌跡をユーモアたっぷりに話して
くれました。

木下社長は、サーカスとは何かという受
講者の質問に、「チャレンジング・ブレイブ
（挑戦する勇氣）」だと答えました。心の師と
仰ぐ内村鑑三氏が後世への最大遺物で説いて
いる「勇ましい高尚な生涯」に信念を重ね
て、「何事も一人では何もできないことを知
り、他人を理解し、また互いに尊重し合うこ
とが大切だ」とも力説していました。

さらに、京セラの稲盛和夫から「土俵の
真ん中でビジネスしないとダメ」と教えられ
感銘をうけるなど、スズキ自動車の鈴木修会
長、ヨドバシカメラの藤沢昭和社長、オムロ
ンの立石義雄会長ら多くの偉大な経営者との
出会いが支えになっていることをそれぞれの
ビジネス訓も交えて熱っぽく語りました。

木下サーカスの公演は十二月七日まで宇
都宮、続いて同月十九日から来年二月二十九
日まで東京・むさし村山で開催予定です。
是非ともお出かけください。

●第八回オープンゴルフコンペを開催

十一月十日、東京都・小金井カントリー



が、ご紹介者を含む十七人が、元気にフィニッシュしました。

ペリア方式による成績は、優勝はゴルフ幹事の杉浦伸二会員（昭和四十八年・政経卒）、準優勝は今回初参加で、ベストグロス（42・47）とドラコン・ニアピン賞（各一）も重ねて獲得した山川博功会員（平成六年・文卒）、第三位はもう一つのドラコン賞獲得者・宮下隆会員（昭和五十三年・政経卒）という結果になりました。

今年のオープンゴルフコンペはこれが最後となりますが、来年は三回ほどのコンペを予定しております。ゴルフのお好きな方は、どうぞ奮ってご参加ください。

倶楽部で第八回目になる連合駿台オープンゴルフコンペが開かれました。朝から雨模様を生憎の天気ではありましたが、

◆九月例会出席者

青木孝、青木幹則、青柳勝栄、秋山隆敬、
 坏昭二、新井久晴、伊東正博、伊原敏雄、上
 西紘治、宇川一夫、大石哲也、大前実之、大
 村託現、笠井正弘、勝保正義、柏森靖、河合
 秀二郎、河村博、木野幸士、日下豊顕、小山
 修、根田哲雄、斉藤春夫、斉藤弘之、斎藤柳
 光、笹田学、眞田瞳、志田憲彦、杉浦伸二、

鈴木隆志、同ご友人、鈴木俊光、関孝夫、瀬
 戸正道、高澤徹、谷慈義、田村駿、当山明
 彦、中川敏洋、長堀守弘、並木洋一、橋口隆
 二、長谷川進一、同ご友人、畠中君代、八丁
 地園子、馬場範夫、原田榮、樋口郁夫、日高
 憲三、福田和彦、藤代耕一、藤巻伴英、松崎
 優子、摩尼和夫、宮下隆、村岡健、山上雅
 隆、山口大介、山口政廣、山田朝彦、湯川孝
 則、義江邦夫、渡邊洋三

【編集後記】

―母校への恩返しするために二昔前から校友マスコミ人の会で業界を志望する後輩に就職セミナーを開いてきた。学生諸君を見ていると、年とともに自主性が乏しくなっているように思う。「足で稼げ」の業界。能動が必須条件となる。教えたことに百罰を超えるほど応えてくれるが、求めている個性が心許ない。いわゆるアクティブラーニングが急務として求められているものもなすける。そういえば「社会に求められる人材」を目指す大学組織改革論が物議をかもしている。採用側を慮つてのことだろうが、もし、余りに実用本位に走るようでは必ずしも歓迎されないだろう。やはり人物本位、大学卒にふさわしい可能性を秘めた人材が待望される。波乱含みの時代が求めている新戦力は、伸び代があるかどうかなのだ。

伸び代と言ふ言葉はスポーツ界から生まれたが、今、野球界が「猫も杓子も右投げ左打ち」という切

実な問題で悩んでいる。圧倒的多数の右投げ右打ち人間を、より一塁に早く駆け込め高打率が望めることから左打ちにしてしまうのだ。たまさかイチローや松井が活躍したことなどで流行し、少年野球の指導者や親が「大成への近道」としてそうさせる。夏の甲子園球児の三割が右投げ左打ちだった。巨人外野手の十六人中六人もそうだ。プロも推して知るべしなのだ。もちろん、成功すればいい。しかし、「本来の右の方がパンチも伸び代もある」ことは関係者にとって自明の理だ。とはいえ、あの大谷が父親に、清宮も母親に勧められて転向している。拍車がかかれば、「ペーブ・ルースが唱えた『ホームランか三振』というプロの魅力がなくなる」と関係者の危機感は募る。

就活にマニュアルはあるが、決してマニュアル人間が求められているわけではない。是非、そう導いていただきたい。
 （齋藤柳光）